

## 簡易に行える膀胱内圧検査法 (有用性と限界)

き さ とし ろう<sup>1)2)</sup> しお の まなぶ<sup>2)</sup> かさ や ち なつ<sup>3)</sup>  
 木 佐 俊 郎 塩 野 学 笠 谷 千 夏<sup>3)</sup>  
 たけ だ ゆ り<sup>4)</sup> しら はら あゆみ<sup>5)</sup> いた がき あや こ<sup>6)</sup>  
 武 田 由 利 白 原 あゆみ<sup>5)</sup> 板 垣 綾 子<sup>6)</sup>  
 にい がき み さ<sup>7)</sup> さか い やす お<sup>8)</sup>  
 新 垣 美 佐 酒 井 康 生<sup>8)</sup>

キーワード：簡易膀胱内圧検査，神経因性膀胱，膀胱内圧曲線，肛門管圧測定，排尿ケアチーム

### 要 旨

水（生理食塩水）を注入して膀胱内圧を順次測定していく簡易膀胱内圧検査を神経因性膀胱が疑われる26症例に実施し，妥当と思われる数値と膀胱内圧曲線パターンを得ることができた。検査結果を薬物療法や排尿法の選択に活かし，61.5%の症例で膀胱留置カテーテル管理を終了できた。

本法は排尿障害に対するチーム管理に有用な方法であると結論できるが，限界として尿道括約筋と同期するといわれる肛門括約筋筋電図の同時測定が困難な点がある。そこでこの限界を補う肛門管圧測定試行結果について言及した。

### は じ め に

神経因性膀胱は，神経・脊髄疾患のリハビリテーション（以下リハ）に取り組むリハ科医にとって適切な対処を迫られる課題となっているが泌尿器科的知識を要するためとつきにくい。泌尿器科医にとっては神経疾患が専門外であるため，

排尿障害を神経疾患の一つとして適切にコメントすることが難しく敬遠されがちである<sup>1,2)</sup>。病態を掴むには尿流動態検査が推奨されるが多忙な泌尿器科医は機器を動かす時間が作れず，全てのニーズに応需することが困難な状況にある。一方，診療報酬改定で「排尿自立支援加算」が始まり，排尿ケアチームの活動が重要となってきている。我々は残尿測定のみでは病態把握ができない症例に対して，以前から簡易に膀胱内圧を計測できる方法<sup>1)</sup>（簡易膀胱内圧検査と以下呼称）を導入し，排尿管理のチーム力向上と臨床アプローチに役立ててきた。この検査は高度な検査機器が無い等で診療機能が限られる中小病院でも普及可能な方法

Toshiro KISA et al.

- 1) 松江生協病院リハビリテーション科 2) 同 泌尿器科
  - 3) 同 回復期認定看護師 4) 同 排尿認定看護師
  - 5) 同 ふれあい診療所保健師 6) 同 ふれあい診療所看護師
  - 7) 益田医師会病院リハビリテーション科
  - 8) 島根大学医学部リハビリテーション医学講座
- 連絡先：〒690-0017 松江市西津田8丁目8-8  
松江生協病院リハビリテーション科